

## ファモチジン服用により振戦（薬剤性パーキンソニズム）の発症が疑われた症例

発表者氏名：岡田 幸二 所属：(株)ユネット 清風薬局

岩崎美代・緒方一・長友保憲・野田千里・瀆武崇・藤谷陽子・山見尚子・白石貴裕・白石敬旺

【概要】年齢 70 歳、女性、血小板減少症で入院し退院時よりファモチジンの口腔内崩壊錠を服用したところ、約 1 ヶ月後に振戦（手の震え、両側）が出現した。ファモチジンが薬剤性パーキンソニズムの原因と思われる症例を経験したため、報告した。

【患者】年齢 70 歳、女性

【病歴】近医で高血圧症を治療中に血小板の減少が分かり総合病院へ紹介され、特発性血小板減少性紫斑病と診断され入院治療した。

2007 年 6 月に退院し外来治療になり、そのころよりファモチジン口腔内崩壊錠（ガスター D 錠）を 20mg/日で内服開始。

約 1 ヶ月後に文字が書けないほど手指が震えると薬局で相談があった。

【経過】

2007 年 7 月 13 日

服用を始めてから 1 ヶ月後薬局で、手が震えると相談があった。服用薬剤での薬剤性パーキンソニズムを疑い、調査。アムロジピン、ファモチジンで、薬剤性パーキンソニズムの報告があることを患者に説明し、主治医に相談するように指示。

2007 年 7 月 27 日

手の震え（+）。主治医に相談できず、薬局でガスター錠の中止を本人希望。

2007 年 8 月 24 日

来局時には手の震え（-）。詳細を尋ねると、ガスター錠を自己判断にて 10mg/日に減らして服用しているとのことだった。（実際には服用を中止していた。）

これらの状況により、ファモチジン服用により薬剤性のパーキンソニズムが出現した可能性が高いと考え、患者の了解を得て、主治医に報告。処方中止となった。

2008 年 3 月現在 振戦症状（-）

【考察】

今回の症例では、ファモチジンの投与により、脳内のヒスタミン系のバランスが崩れ、その結果ドパミン系のバランスが崩れたことにより、薬剤性パーキンソニズムを発症した可能性があると考えられる。

今後日本は世界のどの国も経験したことの無い様な、超高齢者化社会を迎える。

通常、高齢者では、生理機能の低下等、もともとの運動機能の低下があり、その上、振戦等の症状が加わることで、日常生活に対し多大な影響を与えることが考えられる。

2009 年 4 月から施行される新 OTC 医薬品販売制度では、ファモチジンを含む第一類医薬品は薬剤師による販売に限定される。

我々、薬局薬剤師は処方せん調剤による患者の副作用確認はもちろんのこと、高齢者への OTC 医薬品販売においても、十分な情報提供の元、予期しない副作用に備えなければならない。

日常の服薬指導、店頭販売では、常に患者の QOL、ADL の低下に注意を払い、その原因とされるものが薬剤であると考えられるのであれば、積極的にその対応にかかわることが必要である。